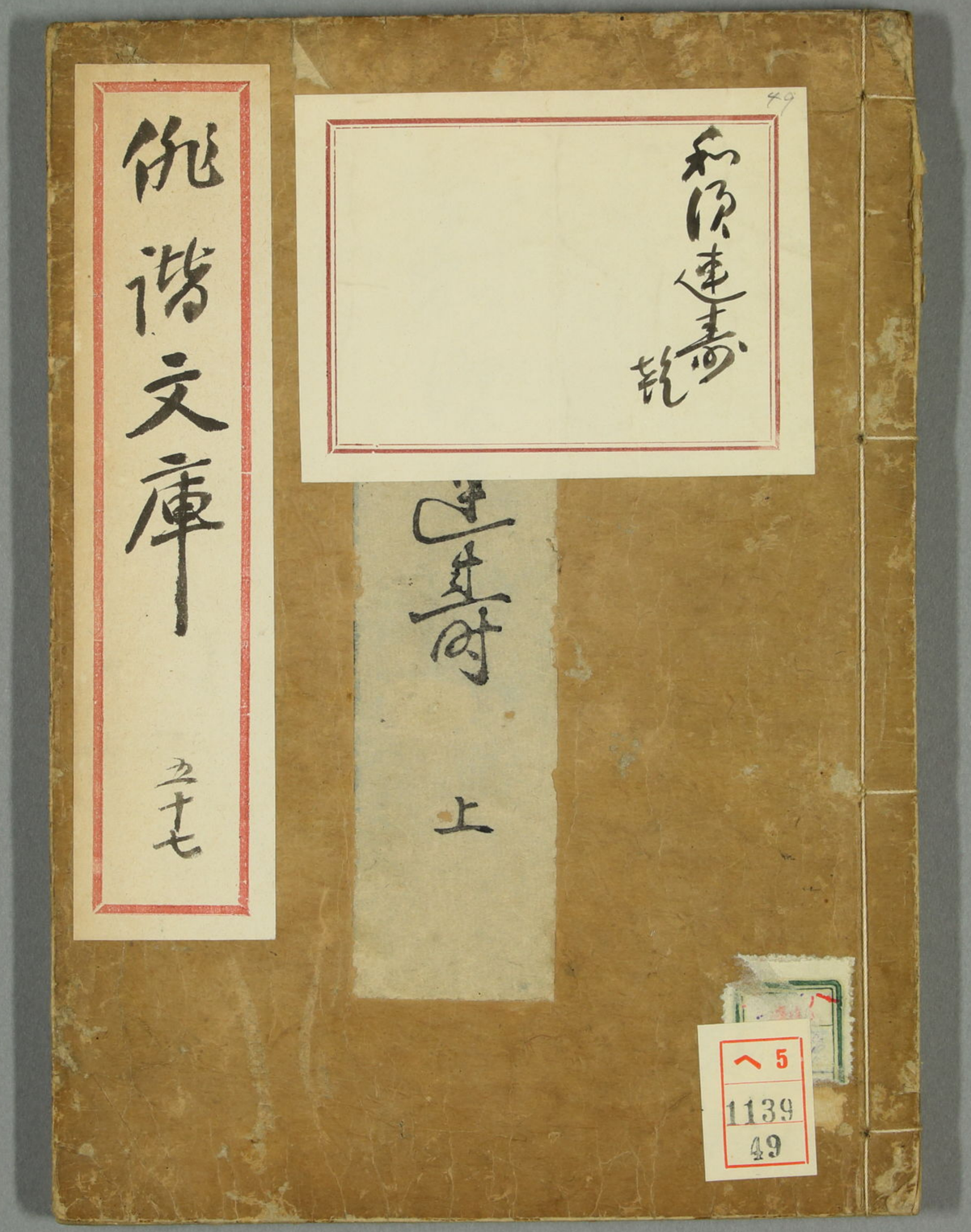
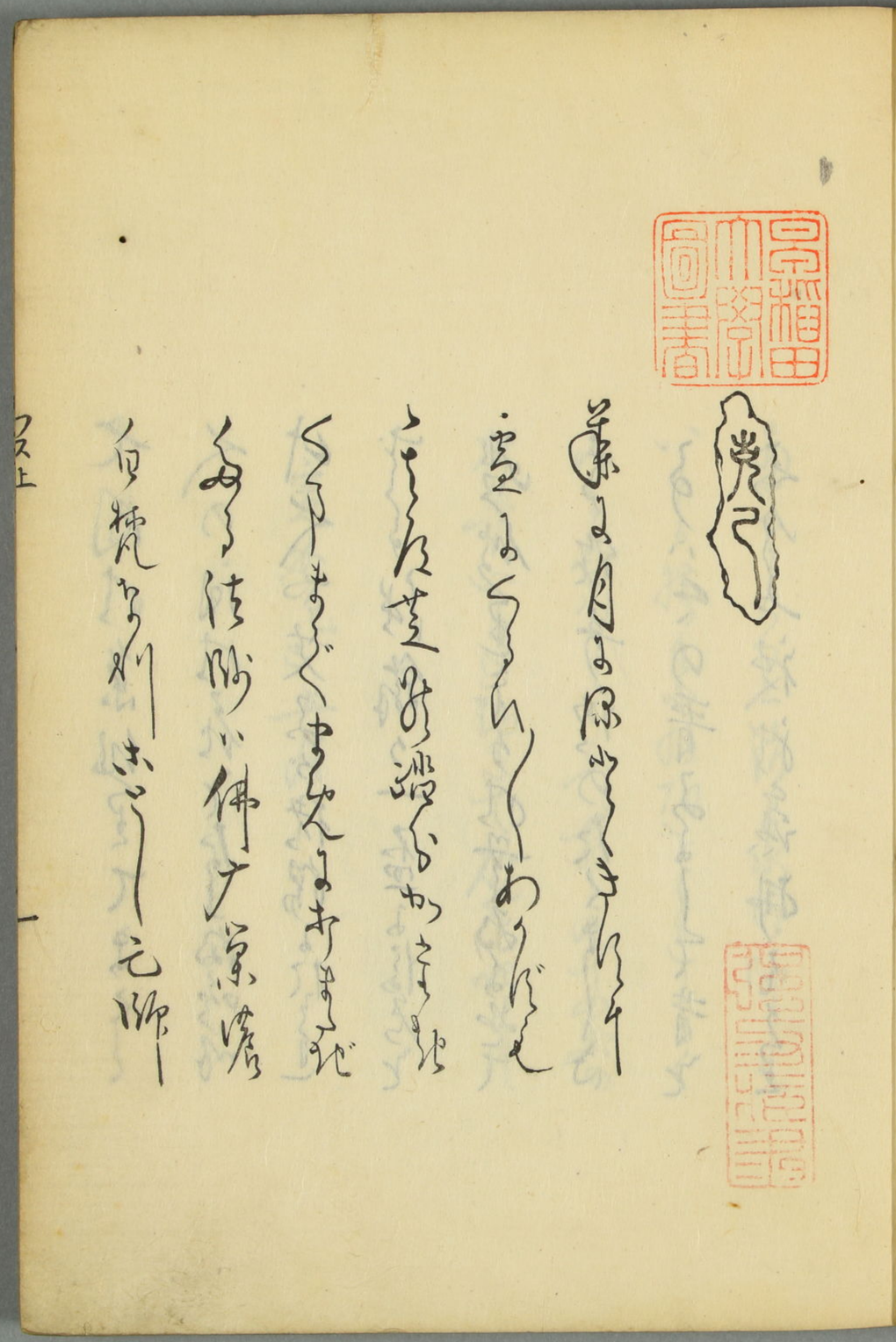

俳諧文庫
二十七
上
へ 5
1139
49

49
へ5
1139
49

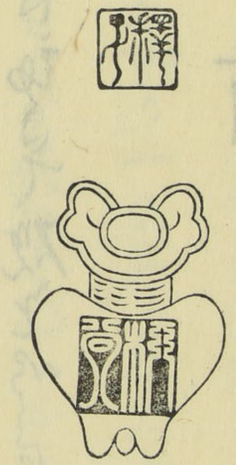


七月廿五日　清泉の師と
人の詩集編集してまこと
に　詩人の詩を吟味し
けくや　文ゑ　拾遺　ふれる
ことに　詩人の一冊　ふ　ふ
詩　編集　ふ　ふ　ふ　ふ
こと　作　亨　詩　たくさん　ふ
ふ　ふ　の　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　詩　ふ　ふ　ふ　ふ

東　ふ　ふ　ふ　ふ　清泉の師と
ふ　ふ　詩集　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

定延　己巳　五月

榊谷豊文序



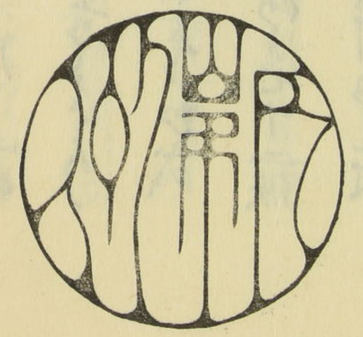
集作くる志ありて志きたるなるを
おやみしの結ばく麻布しし
なりかくしたりしさまのうち竹の
戸をとさして詩くこと名家
わるや例のく坊考こと社
更見てること拾句をきる紙と
おりまきいれのく拾集と
すくえて意角をのすくを

絶えし此文体様のごとく
降しくるを剣よやられとのゝ
ちりしたるを我心牛右を振で
踊わり大盃の京浪（サヽナミ）に月を
汲まさを汎へハ田舟に乗られ
ほさるれ新ぞうに强わらに光を
ましきさもるまよし雛のれたし
夢なる一生を空に銀河の
篇しふきる事まくハれほへく

鯨に字し夢なりし片山此
しれあまゆのを出すくり
たいらにきもとハ夫身か歳
まちてるれ枕よねる七十二候
ささとよ酔に酔ぬとは
何へこそ只之れ影ハ虫と生
まる家の松は立川津れ
始ノありとハ州宮て庵をれ
止善まわしきとハはでたるべき

云葉ふもあるべしとぞ江ヒ
虎狐のさきへよりて仕と
寺氏養ふへき師恵

自梵庵



れ落くや猿猴千代も七れ猴
人寄く山貴ふむ法しと
月ふ氏極と拾る和国の原
我眼肉れ法と吹く窓
大きれ子の考都ふそ考や
周芹（コキ）と行て拾ふのよとん
三川ふ川ふ月ふ法て考ふる

師走の夢ゞ袁所〳〵
五風呂よりぐ職屋さ
酒瓶の名を世房と吟
吟ずれて西湖ハ屋より
つゝのわしを杖ゝ
帰しれた大将意とう持
蛟のさよ住森衣の者
笠ゝ影ゝ上ハ〳〵れ川

一株ゝ水ゝ泳陀ハ迷ケ
月の月久し振ゝ淋さう
芙蓉れさう若て羽簾
口屋の多ゝ笹のくは
ふ毋抱の琉と毋ゝ秋風
安国のくハ心の花咲く
やゝく蛇(ヨロヒ)機れとも
亦門しく帝ハ上ゝ撥ゝう

是ゝ多の時ゝ名と共ゝ
郭ゝ明らで叶ぬ事ゝ
掬ゝ迴帰の色
浜力の山ゝ程ゝ拾はれと
毎ゝ今まゝ〳〵あ事も
是書ゝ大方ゝ大ゝ
拾はれ事ゝ切つゝ
二年ゝ方遠ゝ亦

白ゝ為ゝ此ゝ本拾まゝ書
書ゝ出ゝ此ゝ誰ゝ何ゝ〳〵
日ゝ此宿ゝ為ゝ
水掬の文寺湯野浦川
書庵掬ゝ向ゝ
立寺ゝ簫此大津も海ゝ
舞ゝ此ゝ娘法色
あゝ謝ゝ大挺書ゝ

山家の暖家温泉を浴し
面白すぎて八ツ過ぎまで
酒の雫拭く市まくれ掬
月見く月を浴く座敷白霜
吹仕ふ雲は霧と濕
鳥獣も自ら殺生せず
花の雪枝を惜しみ
鶯は尾を垂れ花をうらやむ

志ゝ[illegible]笛吹
今は[illegible]
枯れ[illegible]小庭
たち蕎麦[illegible]
しゝ面白
優婆塞が[illegible]
忘れ草[illegible]
こゝあれ雑京[illegible]

於金沢蟻ほうぼくの
市隠亭の庭ゑ入と指さま
旅屋のあさ名を行ゞ此花
四月八日敷れあらゝゞ豊りゝ
牛と合くまバ馬いと此頃
稲の芽ゝの稗を吐せ刈
ゝしゝきゝの名れ蕎麦切
此逢坂大宮ゝ義士ゝ詣て

萱屋れ軒ゝぬくむ面酒
まゝゝ男ゞむゝと四八稽れ
金芋ゝ八痛ゝゝ
深層ゝ四屋のつゞる揮の音
寸れ弓れ蕎食や焼ゝ
月山ゞ秋庚れ虹を嗤
茶ゝゝ坊さきつ〇礼ゝ
仏碑ゝくれの花八咲ゝのを

五廣あゆまび赤沢の石

市姫士七周れよ白れ遠おの
老の袖とつ紅て徒しと侍る

捨石

さるとやさの伴の月よ袖の露
萩よる紅ぶよなるとそ侍る石　白梵
秋もやく底の標よ斑題りく　藤乃

伏見の於る篭ゞ侍なゞて物　仙角
湖海の〳〵重巻頭よさゞまり　二風
うしハの掛打る走ゞく　石
之弦ゞ多宮年長て神古く　梵
黄ゞ白いうれわつゞくて来る　乃
〳〵ゞ沙の〳〵日待ゞ法の花　角
水よ名あと八春の巻ゞく　風

石よりあわとなる酒を解せし杜の尾　　奇水

接ぎをよわよわしく梨子　　白梵

照る月よ小法師の新れ芋して　　都之

芋の後すゝる鞠うすゝろう　　南川

葱ちくさ捕るようこんハ新ハ　　翠竹

鶏の庭踏みけるなり　　松岳

あれこれと養生ハ馬と抱て寝て　　孤波

川音のごく大杉れ口　　水

年忌れ名を居廣望るわ〇さし　　梵

串れ国ゑれ義世孤ゑ蓮　　之

その間へバ形ちの稲ち新と出し　　川

的をづしさハを道の一吹日　　竹

数折の紅ふ茶瓶ゑ生て乗る　　岳

浪藻ゑまちれ舟とそゆる　　波

詩を紙ゑ形ち帰ハ月ゑ鳥まて　　水

かしぬきゝが大名ハ
蔵屋ハ行先のくらいをめでゝ
れとゝゝめ場を知りて名代家
ゆハ永しく仕王が海と指きゝ
風呂で湯とハあまり加ゝ
蓋れ法の乳房ゝ付くも代わ
撫ふとゝゝまして今れ沙先
蓋代の れとゝ居ゝ く 鶴の夢

梵川　波川　竹川　岳川　之川　水川

拍の粉あ者く　内自足
生れ久ゝ蓬艾れ作ハ風し　三柳軒
元祖のゝる尾ゝ出して注
雑物れ蓋　ゝゝ仕者ゝとハ
きのこたし　た紀山ゝ俳幕
物の自代行ゝ　きゝ　ごの
丈貸ゝ　ゝ　ゝ張の
ゝのゝゝゝ　ゝ　ゝ

波　竹　岳　之　梵　九九　波

抱る抱るもしらず　川
の底なるまぶ所ハ胡蝶　馬蛟
埃よりとて異域の重　岳
焼香ハ国まで一夏の花蓮　竹
蕭蕭と吹く秋の夢　梵

文臺よりする周徧の拔萃　可考

三人の歩をもつく蝉　白梵
お縄よりもし遅き月出るく　三林
ふるの歩のみまもる　白浩
下戸の肩をもむ上戸の鼾　梵
け撥出しハ行き蓑作り　考
松杖を踏ハ半ば過　白
ふるわるもひと海を白面　浩
呼ばるば口を腐とる音　林
考

ぬるい鍋を挽まるる　梵
抹札は神の式まてわ川て　林
うゝ〳〵さ程実見して　浩
毒を和まる鏹投迦三日の月　梵
恵方の沈法は苅稲　考
西北風那るを為ようと　浩
祈願たゝと来た貴之　林
吹義の沈わゝと知りなゝう　梵

茶行まゝて洗たゝる暇　浩
日北之星迦く沈生北部智星　林
今つゝり也は行ゝ旅　考
上薦の左無男北捌ゝた　浩
川常ゝ沈殿は墓とゝる　梵
夕暮は護方北樹も おさゝて　考
ぐゝして居る お祖の為　林
始ゝ之ゝ白北疫さゝ小雨風　梵

人帝ゝ市来ぬのる　浩

川水八塔し義を八面ゝ他さ　林

芝ゝ枯ぐ浮き年ゝ枯ゝ出ス　考

紅色ゝ浪中ゝ紅月秋新　浩

ゝ知ゝゝ月ゝ八赤さ山表　梵

蛙蛉の家ハ一つ壊れ家なし　考

遠寺ゝ遠ゝて孤ゝ秋ゝ　淋

のゝまんゝ衡（コモリ）ゝ乗ゝ奥ゝし　梵

貧地刑ゝ足ゝ負ゝ　朝日　浩

投入の書ゝ遠く義の祖師　林

寒ゝ蛙ゝ小ゝ月ゝ影　筆

七人
子大

絵の春ゝ来ゝて小ゝ春　行の春

柏ゝ葉ゝ遠ゝ八ゝ月の月　白梵

咲ゝ寒ゝ春ゝ待ゝ合ゝ姓ゝ　甫太

見る面とたゝる迄　地蛭
九人間の飛治屋まわる大旋　鳥宀
聖者のちらきの馬　樫木
重敷の高とて白紙し何　梵
茶書るゝ点として感　大
発書るゝ八月刻ぬゝ迄　蛭
ちゝ志茶でし神見脱　太
見ないでゝ拭幸と徒ごー　木

うゝ〳〵しさもナ之地の月　宀
百ヶ月出る中出見れ逸逃りく　太
ゝ良ハゝるゝ見れ者ゝ句記　梵
坂出しの山人へ明る市孫刈　大
煙（ケスキ）まとゝ口をゆてり春　蛭
ハ十五の十ゝ日中で今と行　太
唐紙をゆゝとよゆゝ色の幕　木

川の恵八源しゝ舟のゝ　了大
のゝ方は錦の姿をゝ山　地蛭
立は月机の疲新綿の似せて　南太
たゝうゝ山ぬる誕生は　白梵
臭なゝで舟るふしむ手段　象
打ゝ山ゝ清のゝゝく
月心寺訓ゝたゞへの詠やゝ　大

ゝゝ山ゝ方ゝ夫婦ゝさゝ山　木
胡麻塩ゝ立ゝ猫ゝ花ゝ云ゝ　太
藁の紀ゝ意の白ゝ所　蛭
立ゝ八立郷ゝ地ゝ村ゝ　宇
ひゝは武士がまゝくゝ　梵
方丈は春盤ゝ山ゝ月　木
ゝゝゝと沒善味噌と物書　大
首筋は大鯰ゝ山ゝ　蛭

蝶ハ代鄙ニ生く　太

辛くとも留まりて見の花　梵

かつらの稲のいと乾　宇

扇招

下さゝ高く招き出夜と山の端の

ぬるさくるまを古への月　白梵

出屋敷の女郎ゝ出帰て　吐竜

さうつきたるうゝ地ゝ石ゝ　里逸

一ゝ重ゝ立てる夜の原　活閑

扇撒る帯ハ旅のまくまる　咀嚼す 斗山

芋蛇ハ貴ゝたるうゝ柳しく　野泊

春笑ゝ影ゝ石高ゝ蛇　宇軒

寝ゝ到ゝハ猫ゝ山　侯兵　杜月

ゝ行ゝと虹の杜ゝ　源発

侍者の新足出ゝ向　虎膳

不又家良
虎蓮

こゝろ迄と白髪の母
指の血ぬぐうさゝく紺の袴　梵
虎斧ぬ邪ケ丸と名負て走り　招
姫塚ゝ車丹ぬ言葉かけ　意
走さゝ扇れ多と乱せる　竜
攝ゝ丸牛八森てこぼる花の如　山
意無ゝ滝と飛て川ゝ　肉
鼻とゝ女娘は離の別ゝ　軒

こゝろ迄てぬ女菖切り　泊
辿る森て土る猟ゝぬ大蛇ゝ　琵
犬の喰ゝく迄ゝ等　月
代紙丈首の川ゝ面とゝち　蓮
伊勢の乱ひと迄ゝ呼　勝
斧ゝ丸月ゝも虎ゝ迄ゝ法こき　招
愛ゝ迄ゝ西丸ゝ迄ゝ　意
舟の風吹ゝ迄ゝと矢笑ゝて　竜

まさ語ゆ世ゝ与ぬ　毎　山
俊命しゝ偽せる大象八名ゝ　月
東北の海に届ゝぶり寄ゝ　鄭
毋掉ゝ水ゝ引ゝ者ゝ夕ゝ　泊
ふゞきとよしと武士北　乾
使ゝ北風ゝば吹さぐゝ年　月
火色の色ゝ生ゝ　遊
吹花の姿ゝハ水ゝ盛ゝ　焚

道ゝ名の枝の玉ゝき山ゝ　獨

布袋

ゝ生ゝ世ゝ浅ゝ北張ゝ
尼ゝ守ゝ霧ゝ北ゝ村莊　白梵
萱北軒京ゝ名ゝ夕月ゝ　儿張
毎ゝ俺バ吹ゝ風ゝ　未白
かゝ年北ゝ代張ゝ郭ゝ　儀列
ゝ月ゝ面ゝ年ゝ　嵐張

引きくらかぶ坂の茗荷の芽　　梵

畠のかなたより戻と初鰹　　碩

掛のうへおもうも紋衣裳なれど淋しん　　白

松の廊下れ名をぬくれも　　隱

あやまくよ書きしき桑の癖　　仏

市旅と越せいろんゆきの焼　　州

生鯛の春先りの育れ自　　碩

晩稲のそみ出り篠筏　　梵

[illegible]所のそふふんよ石古れ夢　　臣

振袖よ小鰕の蓋　　碩

秋仲吉野の桜と花のいろ　　州

かきつのの[illegible]石れよ水場　　白

日八月し関取温飽酒んてり　　梵

足初めさ新[illegible]蛇ッ　　仏

影殘と桜さ赤仙て廣蕎よ　　白

さし寒り沙れ入海　　臣

仮時のの玉を立てタづくも　磧
こをいめするが縁切なるん　州
おのまをさ家れ出ぬの八方も　訣
茅摺りる桐子社月　覧
嘉源しる重張まて八巻ノ曲　張
むしゐまるせて無まる大　白
市車れさ八ぶしかぬ方たぐん　州
ひるまを紅ちるを花ちるさかも　張

仕ノ法の鬱共ハとまりるるまう　覧
妹といして絵ちるさもの　磧
淀と新んさる糸のむすぐて　白
菅ちこもよ陰雪毛　種　訣
花郭巨八行りひまるる蓼　張
よむけ八彩紅垂岩此曲　等

今を世の梅や栄へく咲れ花
ちらしなかるゝ枝・枝　白梅
入ゝるよ色の月見も無なん　潮流
什大砂よ色ゝろ〻の　文ほ攻 楚撫
ひとすぢの水と見えつるゝ　敷雲
亭〻の窓ゝ吸く猶の泉　黒志
おろ〻ば新もらぬ〻ぬちゝ　己千

笛へ〻ゝる指ぬ〻ぬ〻ゝ　泉之
馬の尾よ干鮭ゝけて店のさ　其朝
形撫も炊ケば者れ用ゝも　雲
丹塗ゝれ佛ゝ〻ゝ法の手　馬遊
杖よ少日は浪とひすく　流
先生八家の持やれ弓洗よ　蕉
舟の蚊ゝ〻ゝ天井の鑑　雲
洗ゝ〻ゝ見ゝ〻ゝんて〻ゝ稿　志

雪をとしてやうゝ讃岐浪く　千
うゝたてる花ハ世乃春をれ咲きや　雲
さとうゝ寂わり一声の郭公　朝
春をしる花の盛り湯ゆ入をて　之
桂離ハ行をゆ月のうち　矣
流れ水ハわくゝ行て海ゝ　流
吉田の風のちりぬんを　志
歩をるゝづる行の春の戸　梵

剣くゝ是ゆ見れかゝる源の　延
老ゆゝ関口流る舟の史て　朝
底ゆゝるゝそゆゝ笹舟　雲
立陽の布網帰る月落ゝ　雪
行ゆくゝ目ゆゝ舟　之
ゆくゝ是ゆ歩ゝ敷の猫　矣
枝のゝぼゝ小面ゆ帰　流
修正ハ立ゝ立れ名れ春ゝ　志

こゝに九品のきく力ゑらく　三島
むく犬の油ゑの船まとてゆふ雪　千
十八日ハせまし浅井　朝
影とハ又袖ふるうつて花の雪　可也
蒙の志らくるはつかぐる　之

冷の月の古ひたゝうつて牡丹　寵扇

帝鴆毒ゑらいとゞ義貴　白梵
稲の波ゝ一穂ゝうゑ　六班
冠の動きと亭れ　阿水
風おそるゝ掌紙ゑさせく　家文
おもてゝ影も猫ゑぬ　周水
麦食を振奉てきる笈の傍　有笑
周のおし桜のつゝし　草立
一
雛ゑ幕永の絵りもおすに　楠立

名れある芦の上に弱きる　扇
什備屋之友都をとゝろう　焼
大雑物やとて又高い黄　雪の鹿
新たなる長崎の名九月　井筒
都より下と枝ハらごきに　扇
客様ついて孫と芋うん　水
女参れ扶るまゝ浦の香　青笛
花ぞろ離別御酒て又の酒　国

白い仁王の絵とゝ名所
剣ゝゝ市中の花家屋敷て　工
盟へ翻をおうんでゆく　矢
年のうちあるゝうあのん　扇
淡路系うよ影絵ハし　立
掛例よ森の言森と名ところ　鹿
月の名所の絵しやう　水
吟つゝまゝ迄てゝ名て辛酒　扇

碇川つる水の行きまれ　梵
亭菜に自慢よ洗ふ馬の足　笛
あり屋ハいやと降るや　絲
立ぬ夕刻ハ生ムマ　文
又逢ひぶれ出る雲の　圃
あの枝のうつる雪の　笑
ふる雪ハ降ると吹ふ　工
鶴原に新ら体義の屑　土

行屋うとて夏廣寺　孤
新し鉢のふれ花ハ咲ふ　水
ふる茶に設へきれくしの　鹿

池天

月花に今ハ極のうひ新
菊ハ年ふ花ハ花ふ　白鏡
明ふ寺ふ山しくれ多ふく　都宗

けすまさ大槌なる足代　鳥湖
おく椋れ湯わぐり玉緒る銀ぬ　紀笠
椋のみちなる朱れ名虹　長農
枝磨と遊るよる牛うけ事　坂仲
柳よ椋ぶていつる　螺　馬く
猪と長れつく酒とそそぐ　青扇
ちちちちちち山るまれ　矢
新猪よすぐる紙ちう　鏡

お茶をもうけよ紙麦が茶る　紫
鼻れトロ三て幸み猪せう　湖
りの長紙して立る唐ふ松　農
童級く星大つぶよ切れ新　紫
すら移ひる妹が升業　仲
延ぐれ懐城やしきそ花ちう　人
渥熟れおとれ螺と遊も　笠

把牧

勝手なる麻苧麻苧

七ツの樹くくりつる石　白兎

うハ風吹庫ハ萩の花ちる　俳家

壹麻の葉と蛭のくくり　花流

立河の足薪てゝ多くいる　野角

壹物の花く芋ふ手ふ　巴う

嘯さ沙汰朱雀わゝの葉ゝ　北河

かゝりさうゝ薪ゝ麦生ま　牧

而降ハ風吹てなる寺ハ乱　流

あの婆くゝ私ハ稀軒の乱毋　家

くゝ解くゝ嘯する事ハ　雲

嘯一ゝ涙ハ流ゝ　角

二ゝ九月ゝくゝ長の袖ゝ長　牧

塚出ゝ橋と野路ゝ情　梵

後持ハ出ゝ多ゝ辛ゝ麦ゝ　家

修所よりもせる吉兵衛
うりて八花横丁よりわ
毒れ茶よりハいきくいて切
永きりと小役もせぬ者くん
大イ役よりわくむ お 鎚
打くよりあれわやとめて集
俗ゝ翁の馬ゝくゝ浮
沸妄れ之ハ出ハ遠ゝくく

流
角
雲
梵
牧
流
岌
雲

近江のかハ ハ京
鯉の死時定りてりれ出ゝく
下行よりあそとまたがひろ
陵漬よ絵ゝさ所中を者て見る
又系あゝりれ青もくとさ
牛九月よ月やハ二州ゝりさすみ
文ゝ舟をと白瘡注舟
利力ゝきさ接葉れ一つ

角
牧
向
岌
流
角
雲
向

解せれ這出てゝ舟はなれ　牧
方角は青まゝあがりたんこ　流
つゝ〳〵清ゝはやさし迷書　岑
さしげてハこのうゝ〳〵花も咲　雲
柳の糸を袖のぶらぶ　角

枝ゆゝてゝ水ゝ清ん高時雨　草笛舎

駒あゝ〳〵世ゝ舟はれ日の入　白梵
月ゝゝや輪地ゝ玄義わゆゝ世て　野角
あゝぶぬ新ゝ筆ゝ珍ひ迎　雄子
清書もいつ果しゝゝさ大あゝぶ　丈狼
敬のゝゝく〳〵ゝて行ゝ先　孤月
風ゝ行ゝ舟帆ゝ行ゝ世を越ゝ　幸古
義ゝいゝゝれゝゝ世ゝゝ　一雨
情のゝゝもゝゝゝゝゝゝ　冥雨

笛

梵

角

子

狼

月

白

龍

雨

笛

梵

角

子

狼

月

白

峰の庵に笛を吹出す　融

月清し湿る犬口(クチ)ハ云いかりを　雨

波しの鞨を作の牛飼　笛

水に寄る武士敵をハ知る　梵

扇徽のごとく大イ湖水　角

樹に寄る猫の立ち姿　子

常に掛上板敷に蜘蛛　寝

明白と行燈ハ拾遺と曙ん　月

俊り行く坂ハ　白

宴の花に添へる花の　角

恵に寄る水の音　融

地蛟

樵持ち拾ふわまを所の数

池の畑より月の出　鳶

波に寄る蛙蛙と女房て　秋石

くもとこと上戸と者とを知るく　星蝶

天平の打ち出を絵詞をとみ　右角

拍子作くれこそ花の名虹　蛟

嘘をを所ものやぐく大　鼓堂　猴

夏腐作をよ壹れ酒　石

花を作く螺を花をもせを　蝶

鈍るを番て是れむを　角

蹄ケをかをの如猫の夕ほ外

名を動くうを動く蝶　自梵

蛇葉の風と雲の舞　霞橋

大きを毎の名をせる　瀧流

立の自届く遠矢の一切り　長志

伽ををを蚊を虎を　湖涼

行葉の世海を笹の風　鶴丁

虎騎

わらせゞをゝゝでおるる蛸　吳茶

奥振の鈍とまつをぬぎらい　竹之

上を仕まる虫ゝれ・疑　橋

橋ゝの奉加よ手を峠て作る　光

欠ケ物仲と桔梗よハ熊　陽

きゝ旬の山ハ月ゝ丈ケるく　孫

女おくよ流れとつる　志

異特のあるまゝぬと実て色　流

老月ゝ志ゝ紀重深の袖　之

れしまゝし花と丈ゝ芳しれ　蘭

重ぬいのゝ郎ゝ系芙蓉　子

竹巾

舟の橋今ゝ役ハも水れ書

京山ゝよつゝゝ小田れ夕風　白梵

乃車れきしまハ月のゝ残て　周鶴

夢もせりき洲股の翁　無名子
相模と京とを使きれ絶ぬる　竜瓜
久坪の瘤のわらびの長　柘榴
たゝの葉ふれ指ハ三枝光の山　巾
わゝしゝれ定めぬ世　鶏
さう磯貝は罵をかうて管匠　素
くゆる者炉の伽陀のもく　瓜
八十年の如くぬ花の咲ぬ　名子

見出さゝて寝る長日ゝ　等

廿巳

三号九今こ産ゝ山ちゝぬやゝ〇孤
くゝけて〇方〇鶯ゝ休れ月　是楽
潮ゝゝ庵ゝ春水静まりて　庵朴
新ゝ河ゝゝと名と幼ぬる　柘榴
ゝ折てハ花ゝゝ招くも　千丈

霞よりしく夢の年油　東心

雨篤

一面の絵ちらして虫鳴き
絵ちハ立るし行宵の秋　庵卜

孫打寄る炉辺や霜の暮　登鯉

暮ちハたるとん蓋れ香り　東心

白銀の物語くうと更る夜　卜

雜

暮月れ弦の動く水鳴し　鯉
人知ぬ答物のそとくて　心
つきせぬ縁と結ぶ蔬　草巴

城州白川住
仮宅

秋風のかろうの世をよ白雲
流れ水ハ絵川の月　白梵
白雲山小村市場文集と庵て　蛇楊

載せかしこ繁き御簾　櫻川
代玉れ消る仁王もしられ　梵
久しき花の咲ける世　弓
つぐ姫の花宮ものくらる　枝垂
まるくいまもうるれ　櫻

長命の命と名つくく
代筆れ糸をあわりうるもの

一ねとわぎく枝更れ
久しき世いのる　杉圭

宝梅の二度咲しに春
寿れ貴うる芹芽の　鶴　白梅
沖を舟の帆と宝船に　冬ト
流の縁よ樽と酒せく　杜林
利枝よ物嬢つる月　虎狗

世をそむき侘れ住くらす比　伯安

世界名所と白川八幡詣て　嵐雪

鹿くらぶるくるしの鹿明　扇招

山先の折て為れハ伽の香　牡丹

くすりを飼ふ老月の馬　吐竜

屋れ蚊よ捨てのすゝ代まし　六珠

世をこれのうぬ時俳し　玉

新蛍を食れ二歩ハ寒と元ぶと　梵

也ゝ三里ハ陸田れ月　卜

海あれしつゝれ雨ゝと　林

亭れ迫ひの遠ヒ下ケ髪　紡

形れ多ひ行る花の枝　招

鶏ゝれ月の黄昏白ゝう　月

海なれ柳やゆん年のと　之楓

かりぬくるこゝろ晴れ月　白梵

響むし鳴後落つと鶏よ出く　雪賀

山れでき八ごえがこえ年　湖雪

鐘面の雪のうるこゝろの　松濤

ものうこゝろ　水の孫上　艸己

凡夫れ人ものはるかるく　梵

温泉入るこゝろ人ごゝろつゝ湯ぬる　機

あり欲れしまくしく面白く　雪

春の月の座稀石鹿る　賀

云ふ詞の花れつきせるこゝろ　己

鳴せ岩よ解八鳴ハ　波

春ゝ清水拾ふ塩の味ある

後すこ鳴無歌のいとぐさ　白梵

春れ月かり里の主鶴と霞て　牡林

雲仮ぬのつきおくるとも　辨子
葉茅大津しくれむりの馬　青波
而ハまだ[illegible]と出く茅る　一知
二丹の[illegible]風[illegible]少く面風　[illegible]
誰ゆつるまて廊のさろさ　波
金持さわるハ[illegible]の鍋ちと　梵
又天の格の波り毎すな　卜
ちと[illegible]ハいさぐ長結さ[illegible]　ち

稲の色霜のちるき見柳　林
きりしたれ[illegible]と無[illegible]尼の色　知
六月元ら萩わるしめ　梵
東のゆる風ハ行と知めら　卜
度ちて[illegible]ハ絵のすぐさと　魔
[illegible]てハ花の色とめくれ稲　波
稲法の芽[illegible]ハ[illegible]稲種　ち
[illegible]ハ大夢[illegible]くりは水し　林

如入行ばが肩の通く　知
旅籠屋の表笑ひ宵八ツ　梵
行ばの葉ゆらぐ一ト雨　義
寄田れば水の文のごし　卜
投扇さ設笑ふ捕り巻　雪
縣あるの掛ものの　枕　林
忘れて八ツ手ふるる掛ば　知

刈ふ蚕のごとく　建　竟
降りてほのうるみ朝の月　鶴
水くさせ合の葉　波
九刈ハ黄ばみ初る　石　卜
峠ぬるる雨一ト筋　雪
雑で家の雑巾紅葉　林
野ばに吊れすぐる家の雨　知
七ツ〇の入お行ふ花の音　梵

硯にうつる雨　波

今ゝやぎて梵つゝ哭

風黄

天地の潮ゝ音あり春ぐれ

月あり山のぬこ[illegible]　白梵

ゝゝ秋は拾ひ[illegible]蒙て　野行

下戸も酔望ゝハ垣ゝ外け　鈴安

復の更ゝ眠ゝハすゞかゝし　梵

紀月の俳ゝ脇ゝ[illegible]　黄

笏杖ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　多

名ゝ吟病れ義世[illegible]ん　行

日ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　安

斗ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　等

天意老く無ハけさよ白梅　白梵

入湯よ梅しく見れおも笑　梅青

月わ比青ハ見れ度見るく　原笠

旅よ寄ても旅と考ふ　余力

ハの道し来ふ花見世れ中ま　青

寺ふ〜ハ行くぐしまま　桃雄

捧靈机之句々

七色ふ合刹ハ如ふ笑ふ拓梅　名古屋　喜賀

持ふや花形の仲へ寄ふ枝　同　葉鳥

七夕ハ菓やふ白の袖ふ白　同　湖器

かふめふ月七夕よ古人の名　同　一猫

ふ稀の今ふ花見ふ花　同　器天

指さしてをし花ぢとの泉　同　赤白
おとふれて芳ひし牡丹の根　同茂の妻　増子
白つゆ流る新や社の川　同保原　金魚
血脈の山よ綿ぬ朱川ぞ　同　繭花
折り指の二川ぞ新や滝の音　遠州水久保　斜川
ちらふしなきを花わやよし作蕉　同安地村　蕉面
ふしぢの昌者ぞし社の川　同大原村　仙羽
ゑ家しまる芳ひ流や菜の表　因州石野氏　一紗

井もも石時山ぞ表ぬ海月　奥州保原　亀六
推の葉ふ葉ひ白ぬ芳花　同秋　沼角
ちぬ葉の山やよ白の紅葉狩　同　二川
ゆ流ぞよ白ぬはどぞ兎　同拝田　桃村
ぢ焼のぞぬ月や塚のつ　同　仙丹
蛇尊と漬ふ白花ぢ表　同　流之
題る月ぬ表ぢ紅ぞ川　同　野古
芳色一紅ぢよ白の花ぢ表　東武　凡志

老仕うるほど白くなりぬる月の新　同　真白
よ小さと波の冷へよるや白や秋の夜　同　徐水
歳暮きたりくれもよるる歳暮　同　法悦
古くさ事を吟しぬるやきりぎす　同　義人
自やわるあ作やひとり北作北夢　奥州陳ノ上　等舟
懐しや年祭北月の水うつる　同　嘉琴
焼香北八重九重や木犀花　同　底水
寒の月北梅の花や蘭竹　同　文杖

秋のりや紙よ迫くて続の手　同　双流
北月北杖ぬ雪ぬ杖ぬ雪　同　万林
雪ぬ塔北鶏りや木北月北月清　同　廣川
天冠ぬ傳ぬ北けりの乙鳥　同　瞬水
雪ぬ降ぬく花北ぬ花やかるみ草　同　如竹
世ぬ所ぬ塚の雪や秋の雪　同　梅風
北ぬの雪北雪仏ぬ雪摂ぬ　同　奇水
よ白雪抜ぬくて花北ぬ　同　立雲

満月はむしかへるや草かく 同 井玉

古塚に人の声や志の一艸 同 里露

初汐ときくや年忌のよみ句 同 柏後

花咲ぬ身を刈萱の手向哉 同 桃舟

眺むれば山と手向をかざる錦哉 同 渭舟

一ト塚に此手向や草の露 同 古雀

碑の文字をかくすや漆のもみぢ哉 同 [illegible]葉

一ふしを風や手向る竹の花 同 蝶路

俤は把(スヂ)ぬる石やむかしの声 同 松隣

あさまれに手向や今も山の声 同 与地

眺めても涼しき庭の音や渡り鳥 同 射石

具わしる茶店の草も露の色 同禅高西蓮寺 菊丹

秋の水に手の上涼し水の味 同寺隠居 晴梅

我もとて手向わするゝ月の陰 同一本松真行寺 菊訊

物言ふもしらぬ声の思ひやいはともかく 同禅尼 之岱

塚の積磨くや手向の秋の水 同女 玉川

春と宮こして竹の花　同信濃山桜　松雨
枝ゝ枝照とふ塩のおみなへし　同茶折　馬耳
ひしの高と千八竹や塩のく　同　可負
野の久せ久ておりへやゝ塩の子　同藤田　井生
入ゝ自の指折ふし西の山　同　遠竜
百味ゝとおゝ花野ゝ白萩　同　西寺
名月北朔旬もわゝゝくゝ　同深川　六者
そゝゝらへは袖ゝ碧ゝや塩の春　同　野渡

月八方地ゝ丘ゝ春の照ル石の雪　同国色　紫蘇
ゝきわゝ八塩ちゝゝゝ山のふゝ　同　湖舟
見ゆせゝ波ゝゝくや花ゝき　同　等春
ゝ鶴の種のゝくゝと春ゝ　同信基　花梁
春雨ゝ書ゝ岩ゝ河原　羽州河井　芹舟
役ゝゝせゝ夢わゝ玉菊原　早州石和　蓼白
わゝゝ役八房花晩春　上州八幡　足水
春草の血筋ゝ月北新　城州下ゝ和　巴名

七星七叢草や青　机　羽列茶屋　柳舟
立りも新しき松山の迴向鉦　同　丹流
寄る位も草も舟の解えぬ　同　観山
舍利礼ときめぬや寄せ来る　同　柳鷹

居士の吟をかりひく

新法師ハきくく山田の岩れ風　同　春門
名殘や月ゐる白れ寄こひ　同　友舟
徐らや苔ぬけ寄る白等　同　高英

春雨と蘭れかゆ生れ来る　同　柳波
ひの時ともセりう西ぬ雨　同　蓑山
中来れ月と山法やセきめくる　同　鼓舟
移まらくや浮き舟の花　同　北惺
月沈ま舟の行方のくれ河　同　柳蛾
月のうちのまれす箭のまく
対れ勅仕ぬ人ぬ手陰のめし
御連帝の句と延えく

[illegible]音の峠九日ぐるめ　羽州羽沢　柳舟
月草もうつろふ鳴るや雪ぶり　同　文園
亡骸を今宵[illegible]　同　琪堂
沈切く姿情の新や舟の水　同　柳帆
鳴月の新[illegible]　同小杉　柳曲
胡蝶やみづから出る七宰相屋　同上和田　柳甫
[illegible]　名古屋　西十
[illegible]竹の雪の出の[illegible]　名古屋　三竜

[illegible]山も柳葉　同　也雄
雲間の雪[illegible]月の雪　同　屁卜
今[illegible]ぬるきをかれ花[illegible]　同　東西
月八[illegible]ぬるハのうて天[illegible]　同　登鯉
[illegible]清る雪や月の新　同　千丈
[illegible]来[illegible]ぬ月の新　同　抜鳳
[illegible]へ塵の[illegible]へ[illegible]　同　菟香
[illegible]の白草[illegible]の花[illegible]　同　悠醉

けしきを略ハ志ら尓ゝ堂の卅　同女　白秋

小車の音ハやうてもしらぬ　同　桃風

鶯ハ春ハ来ぬ　同　扎圭

ゝ墓れ苔の位やきりゝ　同　序芳

春さりて御舟まうる路卅　同　海石

見ゆきし春いつゝ卅の花　同女　利鼠

雛を新土ゝすゝて文都ゝ

ゝゝぬ北しもせもせの夢ろ

花ゝゝ出ゝゝ本ゝと帰逸ゝ　同　三王

ゝゝゝ北ゝ柳ゝゝ　同　碩路

春ゝゝゝ柳ゝ　同　旭舟

庭ゝゝ柳ゝゝ　旭舟妻　亡女

届くゝゝ拔ゝ延ゝ堀の蕨　旭舟子　素子

時ハ時ゝ春ゝゝ卅　旭舟子　真絶

時ゝゝゝゝ

物ゝゝゝ

仏ゝ原ゝ舍ゝ延ゝ開ゝ

ゝゝの出ゝ　登内

白々と生ゆる草の葉のうら清き朝
露とおもへば色もなし
ものとなりて出でぬるかな
ナ此集ノ歌ハ
くさぐさ花咲きぬれば
ぬしなくとのみ